

# 高祖道元禪師の奉讚降誕佛

——永平廣錄に現はれたる浴佛上堂語——

神 保 如 天

一

我が高祖承陽大師が、釋迦牟尼佛の降誕を如何に讚歎し供養し恭敬せられたかを、大師の廣錄を通じて、聊か其の所見を述べて見たいと思ふ。

永平廣錄は十卷ある、侍者詮慧、侍者懷昇、侍者義演の名に依て編纂せられてある。詮慧、懷昇は大師の法嗣であり義演は懷昇の嗣て高祖の孫である。故に編集者並に編集の年代に於て相當權威あるものと認められる。この十卷の中、第一卷は興聖寺語録、第二卷は大佛寺語録、第三卷より第七卷に至る五卷は永平寺語録、第八卷は小參、法語、第九卷は頌古、第十卷は眞贊、偈頌を集成してある。その第一卷より第七卷に至る興聖寺、大佛寺、永平寺の語録は大體において説示の年月順に配列されてあるやうである。無論その一一に年月が明示されてある譯ではない。然し第一卷の最初に「師於嘉禎二年丙申十月十五日始就當山開堂拈香、祝聖、罷、上堂云々」とあり、第二卷の卷頭に「師於寛元二甲辰七月十八日、徙于當山。明年乙巳、四方學侶、雲集座下」とあり、其の卷尾に近く「改大佛寺稱永平寺」

上堂 寛元四年丙午六月十四日」とあり、第三卷の卷末に「寶治二年戊申三月十四日上堂、曰、山僧昨年八月初三日、出山赴三州鎌倉郡、爲三檀那俗弟子説法、今年今月昨日歸寺、今朝陞座云々」等の記載があるからして、其の前後の歳旦三佛會、結夏、解夏等の上堂語を察して、おほよその年月日時は推定し得らるゝのである。

## 二

この廣錄に収録せられてある廣語は興聖寺開堂の嘉禎二年（一八九六）十月十五日より建長五年（一九一三）八月五日、病の爲に京師に向はせられし日まで、即ち大師の三十七歳より五十四歳まで前後十八年に渉る語録であることは既にいふが如くである。輪王寺本の記するところに依れば上堂四百三十六、頌百七十五首（第一卷より第七卷までに）を収録すと云つてある。高師大師の爲人接衆、法益説示の如何に殷盛であつたかは此の一事を以ても知ることが出来るのである。

この四百三十六回の上堂の中に、釋迦牟尼佛の三佛會、即ち佛生會、成道會、涅槃會の上堂が二十三回あつて成道會、涅槃會は共に七回、佛生會浴佛上堂が九回に上つてゐる。其の卷と時（推定）處とを表示すれば左の如くである。

標	(卷)	處	時	祖壽
一、浴佛上堂	(卷一)	興聖寺	曆仁元年	三十九
二、佛生日上堂	(卷一)	全	延應元年	四十

三、浴佛上堂(卷一)	全	仁治元年	四十一
四、四月八日浴佛上堂(卷二)	大佛寺	寛元四年	四十七
五、浴佛上堂(卷三)	永平寺	寶治元年	四十八
六、浴佛上堂(卷三)	全	寶治二年	四十九
七、浴佛上堂(卷四)	全	建長元年	五十
八、浴佛上堂(卷六)	全	建長三年	五十二
九、浴佛上堂(卷七)	全	建長四年	五十三

嘉禎三年より建長四年まで、十六回の四月八日即ち佛生會があつた譯であつて、多分毎年之を行はれたであらうが上堂語が散逸して侍者等が之を収録し得なかつたのもあるであらうと思ふ。然し其の中九回もの浴佛上堂語が収載せられてあることは遺弟諸師の偉功であつて、兒孫たるものゝ大いに感謝し且慶幸とせねばならぬところである。

### 三

高祖道元禪師の浴佛上堂語を擧示するに先だつて、高祖は釋尊の出世年代及び御傳記に就いて、如何やうに考へておゐでになつたかを一寸知つて置き度いと思ふ。釋尊出世の年代に就いて特に述べられたものはない、正法眼藏佛性卷に出てゐるのが最もハツキリして居るやうである。

釋迦牟尼佛言一切衆生悉有佛性、如來常住無有變易。これわれらが大師釋尊の獅子吼轉法輪なりといへども、一切諸

佛、一切祖師の頂額眼睛なり。參學しきたること、すでに二千一百九十年當日本仁治二年辛丑歲正嫡わづかに五十代至先師天西童淨和尚天二十八代、代代住持しきたれり。東地二十三世、世世住持しきたる。十方の佛祖ともに住持せり。

日本の仁治二年辛丑は西曆千二百四十一年で、それを溯つて二千一百九十年といへば西曆前九百四十九年になる。これは法琳所定の年代に相當し、周の穆王五十三年壬申（西曆前九四九）釋尊入滅の説に一致する。この説は特に佛傳研究者にあらざるに限り一般の佛教者が之を用ゐてゐたので、高祖も亦この常途の説を採用せられたのであらう。この説に依れば本年は佛滅二千八百八十三年となり、佛誕二千九百六十三年となる譯である。本年を以て佛誕二千五百年とする衆聖點記の説とは實に四百六十三年の隔りがある。大佛寺に於ける四月八日浴佛上堂語に

我本師釋迦牟尼佛大和尚、二千年前今朝、現生降誕于淨飯王宮毘藍園裡云々。

とある、この二千年前今朝降誕の語は固より大數を擧げられたものであらうけれども、本年より六百八十八年前の寛元四年に降誕二千年といはれたのだから今年は二千六百八十七年になる譯で、此の方が二千五百年説に却て近づいてゐるのは面白いと思ふ。釋尊の御傳記に就いても、やはり十九出家、三十成道、八十入滅の説を依用せられてゐる。正法眼藏行持卷に

慈父大師釋迦牟尼佛、十九歳の佛壽より深山に行持して、三十歳の佛壽にいたりて大地有情同時成道の行持あり。八旬の佛壽にいたるまで、なほ山林に行持し、精藍に行持す。云々

と、これ亦通途の説を用ゐられたものであることが知れる。高祖の正傳佛法の擧揚には是れらの問題には餘り重點を置

かなくてもよい、宗乘擧揚の上には更に別天地あることを看取すればよいのである。

#### 四

永平廣錄卷一、興聖寺語錄に載するところの浴佛上堂語は三回出てゐる。建撕記に依れば「天福元年癸巳（一八九三、大師三四）春ニ落成シテ興聖寶林寺ト號ス」とあり、「同年夏安居日在觀音導利院ニ示衆」の摩訶般若波羅蜜卷あり、又「天福元年中秋ノコロカキテ鎮西ノ俗弟子楊光秀ニアタフ」といふ現成公案卷あり。學道用心集に「天福二甲午三月九日書とあるが如き、又眞字の正法眼藏序に「嘉禎乙未（元年、一八九五）一陽佳節、住持觀音導利興聖寶林寺、入宋傳法沙門道元序」とあるが如きは、廣錄第一卷の卷首に「師於嘉禎二年丙申十月十五日、始就當山開堂拈香祝聖」と記する以前に、興聖寺に於いて以上の如き説法があつたことを證明してゐる。故に廣錄に載する所の語録は開堂祝聖を以て起點とし、それ以前の興聖在住期間の語録は全然収載してない譯である。それは懷辨禪師が高祖大師の會下に投じたのが天福二年であり、嘉禎二年冬に乗拂せしめられたといふほどであるから、是れらの法語等を記録する適當な隨侍の者がまだ其の頃無かつたので、或は散逸してしまつたのか、或は創業の時代であつた爲に示衆すべき學人が無かつたからかも知れない。それで三回の浴佛上堂は嘉禎三年丁酉四月八日以後でなくてはならぬ。次に高祖大師の興聖寺在住の年數を考へねばならぬが、廣錄第二卷大佛寺語録の卷首に「師於寛元二年甲辰七月十八日徙于當山、明年乙巳四方學侶雲集座下」とあるから果して寛元二年七月まで興聖寺在住かといふに然うては無い。建撕記に「宇治ノ寺御住ノ間ハ自天福元癸巳年一至寛元元癸卯年二十一箇年也」といひ、又寛元元年癸卯の條下に「コノ年七月十六日ノ比、京ヲ御立チアルカト

覺フ。同月末ニ志比莊へ下著アルト見ヘタリ、「七月十六日ニ深艸ヲ發出シ越ニ著シテ最初ハ吉峰ニ住セラレテ閏七月初一日ニ開示始マレリ、十一月十六日マデニ十二卷ヲ示サル」とある。されば寛元元年七月まで興聖寺在住とすれば嘉禎三年より七回の四月八日即ち佛生會があつたことになる。語録の記載を概ね年月の次第に排列しあるものと假定すれば嘉禎三年には月夕、開爐、冬至の上堂があるのみである。歳旦上堂の次にある浴佛上堂は曆仁元年（實は改曆前、嘉禎四年也）なるべく、其の次の佛生會上堂は延應元年であらう、又歳旦上堂の次にある浴佛上堂は仁治元年であらうと推定し得るのである。仁治二、仁治三、寛元元の三年には見當らない、或は遺落したのかも知れぬ。然し此の三年間は正法眼藏の説示の最も多い時期であるから、特に浴佛上堂語を示されなかつたのかも知れない。

## 五

九回の浴佛上堂語を全部此に掲ぐることは餘りに多くの紙面を費すが故に、其の代表的ものみに止めて置く。興聖寺に於ける三回のうち第一回曆仁元年の、を先づ挙げる。

浴佛上堂、曰、今日我本師釋迦牟尼如來、降ニ生于毘藍園裡。年年有ニ今日、每ニ今日ニ在ニ毘藍園裡。且道、大聖降誕也否。若道ニ降誕、許ニ一枚修行。若道、不ニ降誕、許ニ一枚修行。既能、如是、不レ被ニ山礙、不レ被ニ海礙。誕ニ生王宮。既不レ被ニ山礙、不レ被ニ海礙。被ニ生礙ニ也否。今日山僧祇道、不レ被ニ生礙。既能不レ被ニ山礙、不レ被ニ海礙、不レ被ニ生礙。盡界盡地諸人與ニ釋迦牟尼如來ニ同生而言、天上天下唯我獨尊。乃是獅子吼、乃是嬰兒啼。恁麼見成、作麼生道。良久云、盡界彌天嘉運至、老婆心切聖降誕。聖降誕、將ニ什麼ニ供養、奉觀、禮拜、灌浴。將ニ清淨大海衆、入ニ佛殿ニ有ニ行儀。

この一則に於いて、「盡界盡地諸人與釋迦牟尼如來同生而言、天上天下唯我獨尊」、この宗旨を會せば眞に大聖降誕を供養し奉觀し禮拜し灌沐し奉ることを得るであらう。灌沐の端的は「將清淨大海衆、入佛殿、有行儀、」これ報恩の窮盡である。仁治元年の浴佛上堂にも、「良久云、大衆同到佛殿、灌浴我佛」と、これ理盡詞窮のところを敢へて語言を以て示されたものである。松島の絶景を稱して芭蕉が「あゝ松島や松島や」といへる、千代尼が「ほとゝぎすほとゝぎすとて明かしけり」といへる、皆詞窮れる上の文字である。大聖釋尊の降誕を奉讚する底の一句他なし、「南無釋迦牟尼佛、香水洗頭浴老兄」と、これ高祖大師の劈腹剜心である。

## 六

次に大佛寺語録に一回の浴佛上堂語が出てゐる。「寛元二年甲辰七月十八日徙于當山」といひ、「寛元四年丙午六月十五日改大佛寺稱永平寺」とあるからして、傘松峰大佛寺と稱せられた時代は前後三年、滿二年である。其の間に四月八日は二回あるけれども、寛元三年には結夏と解夏の上堂あるのみ。寛元四年には歲朝、二月十五日、三月二十日の上堂に相次いで四月八日浴佛上堂がある。其の語に、

曰、我本師釋迦牟尼佛大和尚、二千年前今朝、現生降誕于淨飯王宮毘藍園裡、周行十方七步、一手指天、一手指地、目顧四方云、天上天下唯我獨尊。大家要見世尊降生。拈拂子作一圓相曰、世尊降生了也。盡十方界、山河國土。其中諸人、有情無情。三世十方、一切諸佛。與瞿曇世尊、同時降生了也。都無一物爲先爲後。因甚如斯、所以世尊受大佛降生而生降、受大佛脚跟而周行七步、受大佛開口而便道天上天下唯我獨尊。畢竟更道、不

受<sup>ケ</sup>諸<sup>ヲ</sup>受<sup>ハ</sup>、是<sup>レ</sup>名<sup>ニ</sup>正<sup>ト</sup>受<sup>ト</sup>。若<sup>シ</sup>也<sup>モ</sup>恁<sup>ズ</sup>麼<sup>カ</sup>、涓<sup>ニ</sup>滴<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>落<sup>チ</sup>。別<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>。作<sup>カ</sup>麼<sup>カ</sup>生<sup>ハ</sup>。是<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>落<sup>チ</sup>。別<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>。底<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>理<sup>ト</sup>。良<sup>ク</sup>久<sup>ク</sup>曰<sup>ク</sup>、若<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>傳<sup>ハ</sup>法<sup>ノ</sup>度<sup>ニ</sup>衆<sup>ノ</sup>生<sup>ヲ</sup>、終<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>名<sup>ケ</sup>爲<sup>ス</sup>報<sup>ニ</sup>佛<sup>ノ</sup>恩<sup>ヲ</sup>。作<sup>カ</sup>麼<sup>カ</sup>生<sup>ハ</sup>。是<sup>レ</sup>傳<sup>ハ</sup>法<sup>ノ</sup>報<sup>ニ</sup>恩<sup>ノ</sup>底<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>理<sup>ト</sup>。下<sup>ニ</sup>座<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>大<sup>ノ</sup>衆<sup>ト</sup>同<sup>ク</sup>詣<sup>シ</sup>佛<sup>ノ</sup>殿<sup>ヲ</sup>、拜<sup>シ</sup>浴<sup>シ</sup>如<sup>シ</sup>來<sup>ノ</sup>清<sup>ニ</sup>淨<sup>ニ</sup>法<sup>ノ</sup>身<sup>ト</sup>。

と、これ實に奉讚降誕佛の至極である。有情非情同時成道の故に、盡十方界、有情無情、一切諸佛、同時降生の道理甚だ分明である。大佛は高祖の自稱、大佛と世尊と二面なきを以て大佛と同じく降生し周行し開口して唯我獨尊なるを傳法報恩の正的とする。而も其の端的は「下座與大衆同詣佛殿、拜浴如來清淨法身」といふ、これ言語にあらずして禮拜恭敬の信實を顯はすものである。千聖萬聖出で來るとも恐らくは別に一句を著くることは出來ぬであらう。

## 七

寛元四年丙午六月十五日に大佛寺を改めて吉祥山永平寺と稱せられ、それより建長五年癸丑八月廿八日御入滅まで前後八年永平寺に御住山遊ばされ、其の間に六回の四月八日（建長五年を除く）を閱せられたことになる。但し其の中、寶治二年戊申三月十四日の上堂に「山僧昨年八月初三日出山赴相州鎌倉郡爲檀那俗弟子說法、今年今月昨日歸寺、今朝陞座」とあるから、八月三日より翌年三月十三日まで約七箇月御不在であつた。又建長記に依れば「建長四年壬子、今夏ノ比ヨリ微疾マシマス、最後ノ教誨ハ正法眼藏ノ八大人覺ノ卷ナリ。（中略）正本之奥書云、建長四年暮乃至建長五年正月六日書永平寺」といひ、「建長五年八月初五日、師御上洛ナリ、就御病氣檀那雲州太守ヨリ御上洛マシマセト類リニ望ミ申サル、間、二代和尚モ御伴アリ、醫師ニモアワセタマフベキ爲ナリ。御上洛ノ時ノ頌歌アリ、曰ク、十年喫飯永平場、七箇月來臥病牀、討藥人間暫出嶠、如來授手見醫王。草ノ葉ニカドデセル身ノ木ノ部山、雪ニ路ア



ルコ、チコソスレ」とあるから、建長四年夏頃より微恙を感じられ、建長五年正月頃には可なり御重症であつたので、それで御遺誨があつたのであらう。「七箇月來臥<sup>ス</sup>病牀<sup>ニ</sup>」とあれば正月以來御病牀にあらせられ、八月五日に御療養の爲に御上洛遊ばされ、その八月二十八日に終に御入寂になつてしまつたのである。これらの事實を考慮に入れて永平寺語録を拜覽せねばならぬと思ふ。

永平寺改稱以後に於ける御撰述は極めて少い、寛元四年八月六日の示庫院文、九月十五日の出家卷、寶治三年正月の衆寮箴規、建長二年正月十一日洗面卷第三回の説示、建長五年正月六日最後の八大人覺の御教誨、年月の知れてゐるものでは以上の如きものである。説時を記せざる十一卷の正法眼藏は恐らくは此の年間の御説法ならんかと思へども何等確證を得られない。大體に於いて興聖、大佛在位の時代に比して永平寺時代の八年間は説法の數が甚だ少いと云はねばならぬ。然るに永平寺語録の上より之を觀れば興聖、大佛、永平の三處のうち、興聖、大佛を合せて全體の三分の一、永平寺語録は其の全體の三分の二を占めてゐる。即ち卷二の末尾數丁より卷七の終りまでが永平寺に於ける語録である。御撰述の多い時は上堂法語少く、上堂説法の多い時は御撰述の少いといふことは蓋し自然の數といはねばなるまい。

## 八

永平寺御住山中に六回の佛生會を迎へられたのであるが、其のうち五回の浴佛上堂語が永平寺語録に載つてゐる。即ち寶治元年、同二年、建長元年、同三年、同四年の五回で、僅に建長二年の一回を缺くのみである。右五回のうち建長三年のものを先づ擧げよう。

浴佛上堂、曰、衆生得<sup>テ</sup>父領<sup>ス</sup>家業<sup>ニ</sup>、聖者見<sup>レ</sup>師可<sup>ク</sup>快哉<sup>ナル</sup>。整類須<sup>ク</sup>忻<sup>フ</sup>今慶幸<sup>ニ</sup>、春闌彌愛<sup>シ</sup>一聲雷<sup>ノ</sup>。誰言兜率陀天下<sup>ニ</sup>、豈<sup>ニ</sup>但<sup>ニ</sup>摩耶<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>聖胎<sup>ト</sup>。一切恒河沙福智<sup>、</sup>大千界上優曇開<sup>。這箇道理雖<sup>モ</sup>恁麼<sup>、</sup>衲僧家作麼生<sup>。</sup>良久云、摧<sup>キ</sup>空破<sup>レ</sup>有無窮利<sup>、</sup>拄杖弄來尙一枝<sup>。</sup></sup>

これ大聖の降誕を奉祝するの讚頌である。大聖は大聖のみ是れを識る、高祖大師にして始めて眞に大聖の降誕を讚頌し得る。一稱三歎、誰か能く一語を加ふるものあらんや。次に建長四年、大師最後の浴佛上堂語を擧げる。

浴佛上堂。八相成道者、諸佛化儀也。是以、摩耶詣<sup>ニ</sup>到毗尼園<sup>、</sup>菩薩降生現<sup>ニ</sup>世間<sup>。</sup>帝釋承<sup>テ</sup>衣擎<sup>ニ</sup>菩薩<sup>、</sup>人天始拜<sup>ニ</sup>獨尊<sup>、</sup>顏<sup>。</sup>正當恁麼時、寶蓮華開、以承<sup>ニ</sup>菩薩足<sup>。</sup>諸天花雨、以散<sup>ニ</sup>菩薩上<sup>。</sup>即行<sup>ニ</sup>四方面<sup>、</sup>各七步<sup>、</sup>觀<sup>ニ</sup>視四方<sup>、</sup>目未<sup>ニ</sup>會瞬<sup>、</sup>口自<sup>ニ</sup>出<sup>ス</sup>言<sup>。</sup>世間之中、我爲<sup>ニ</sup>最勝<sup>、</sup>世間之中、我爲<sup>ニ</sup>最尊<sup>。</sup>我從<sup>ニ</sup>今日<sup>、</sup>生分已盡<sup>、</sup>是最後身<sup>。</sup>我當<sup>ニ</sup>作佛<sup>。</sup>地涌<sup>ニ</sup>一池<sup>、</sup>而供<sup>ニ</sup>養聖母<sup>、</sup>空下<sup>ニ</sup>一水<sup>、</sup>而滌<sup>ニ</sup>菩薩<sup>。</sup>瓔珞寶衣充滿<sup>。</sup>金牀寶傘圓備<sup>。</sup>蓋是諸天之所<sup>ニ</sup>供養<sup>。</sup>也。宛是機緣之所<sup>ニ</sup>純熟<sup>。</sup>也。天女一萬、圍<sup>ニ</sup>遶於摩耶<sup>、</sup>而扶持<sup>、</sup>諸天五百、讚<sup>ニ</sup>歎於菩薩<sup>、</sup>而祇候<sup>。</sup>三千大千之草木、忽生<sup>ニ</sup>好花<sup>、</sup>一切諸有之衆生、悉被<sup>ニ</sup>光明<sup>。</sup>受苦之類皆脫<sup>レ</sup>苦<sup>、</sup>快樂之輩更增<sup>レ</sup>樂<sup>。</sup>吉祥之瑞相、誰敢說盡<sup>。</sup>慶幸之利益、今日猶新<sup>。</sup>爲<sup>レ</sup>甚如<sup>レ</sup>斯<sup>。</sup>大衆還要<sup>レ</sup>委<sup>ニ</sup>悉<sup>。</sup>這道理<sup>。</sup>良久云、坐<sup>ニ</sup>斷衲僧乾屎橛<sup>、</sup>功夫辨道草鞋穿<sup>、</sup>無明殼豈<sup>ニ</sup>等<sup>レ</sup>肩去<sup>、</sup>從<sup>ニ</sup>此剎那<sup>、</sup>王<sup>ニ</sup>大千<sup>。</sup>

この上堂語を拜誦してゐると、自然に身を毗藍園裡に置き、目に大聖降誕の瑞相を拜するが如くてあつて、自己の身心を忘れて唯天上天下獨尊佛の光明に照被せらるゝの感がある。

嘉禎二年興聖寺開堂以後、建長四年に至る十七年間で、降誕、成道、涅槃の三佛會毎に上堂或は小參、以て釋尊の佛徳を讚歎し供養して大衆に爲人せられたのである。三處の語録に掲ぐるところの數實に二十三回に上つてゐる、就中、浴佛上堂は三佛會中、他の各七回なるに不拘、九回の數を算することは如何に高祖大師が降誕釋尊會に深き關心を有せられたかを窺ふことが出來ると思ふ。高祖大師は常に十方三世の諸佛を以て釋迦一佛に歸し、釋迦一佛の外に諸佛あるにあらざることを深く信ぜられた。知事清規に

可<sup>クシハ</sup>見<sup>ハ</sup>十方諸佛、可<sup>クシ</sup>見<sup>ハ</sup>釋迦一佛。

とあるが如き、又正法眼藏見佛卷に

おほよそ一切諸佛は見釋迦牟尼佛、成釋迦牟尼佛するを成道作佛といふなり。

又即心是佛卷に

いはゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛これ即心是佛なり、過去現在未來の諸佛、ともにほとけとなるときは、

かならず釋迦牟尼佛となるなり、これ即心是佛なり。

とあるが如き、諸佛即釋迦牟尼佛の信仰を如實に表現せられたものである。而してこの釋迦牟尼佛は即心是佛の釋迦牟尼佛なるが故に、「盡界盡地諸人與釋迦牟尼如來一同生而言、天上天下唯我獨尊」といひ、「我佛浴衆僧、衆僧浴我佛」ともいはれるのである。この信念が眞に釋迦牟尼佛を供養し恭敬し奉讚する所以であるのである。

奉讚降誕佛としての浴佛上堂語を掲ぐることは以上を以て之を止め、最後に高祖大師の釋迦牟尼佛に對する當成作佛の大誓願を載せて、この小文の結末と致したい。

寛元四年（推定）永平寺に於ける夏安居中の上堂の語である。

上堂。我本師釋迦牟尼佛大和尚、先世作瓦師、名曰大光明。爾時有佛、名釋迦牟尼佛。彼佛世尊、壽命、名號、國土、弟子、正法、像法、一如今佛。彼佛與弟子、俱至瓦師舍宿。瓦師以草座、燃燈、石蜜水漿、施佛及比丘、發誓願。當來五濁之世作佛、佛及弟子、壽命、名號、國土、身量、正法、像法、一切皆如今釋迦牟尼佛、不異。如其昔願、今日作佛。國土、弟子、正法、像法、壽命、名號、一切皆如今釋迦牟尼佛。日本國越宇、開闢永平寺、沙門道元、亦發誓願。當來五濁之世作佛。佛及弟子、國土、名號、正法、像法、身量、壽命、一如今日本師釋迦牟尼佛、不異。唯願佛法僧三寶、天衆、地衆、雲衆、水衆、拄杖、拂子、證明、此願。雖然如是、今釋迦牟尼佛、親曾在古釋迦牟尼佛國、佛及弟子、來宿自舍、一與供養草座石蜜、而發誓願。今已成就其願、而今道元去佛甚遠。還有下見佛身、聞佛說、分上麼。拈起拂子云、今釋迦牟尼佛、及佛弟子、俱至拂子頭上宿。又拈起拂子云、八萬法藏圓音在耳。又拈起拂子云、我今供養發願、頓得作佛、一如所願、不異也。諸人要知、恁麼道理麼。以拂子打一圓相云、莫錯舉好。

過去現在未來の諸佛、ともにほとけとなるときは、かならず釋迦牟尼佛となる所以、全く世世の諸佛の誓願に一如するものなること、此の一則の上堂の垂示に依つて明らかである。今拈起するところの拂子頭上に三世の釋迦牟尼佛一時に

宿して説法し供養發願し頓に作佛を得るとき、道元禪師の身心釋迦牟尼佛に藏身し、釋迦牟尼佛の身心道元禪師に藏身して全く二面なき、これを打一圓相といふ。但し一圓相なりとはいへ錯つて擧すれば七花八裂を免かれぬ。

拂子頭上にも拄杖頭上にも、鋤鍬の上にも肥柄杓の上にも、乃至十呂盤の上にも天秤棒の上にも、釋迦佛を誕生せしめてこそ眞の奉讚降誕佛、恭敬供養なれと確信する。

——(二五〇〇、一一、二八)——